
金澤 正剛 基調講演・三巨頭の生誕 333 年を記念して

概要 今年 2018 年はヘンデル、J. S. バッハ、ドメニコ・スカルラッチィが生まれてちょうど 333 年目にあたる。それを記念して、この 3 人それぞれの史上に残した業績を比べてみたい。ヘンデルには《水上の音楽》などの器楽の名曲もあるが、なんといっても重要なのは劇音楽の作曲家としてであり、さらには興行主としても後世に模範を示した。バッハもまた《ブランデンブルク協奏曲》をはじめとする世俗作品もあるものの、重要なのはルター教会の為に作曲した合唱曲やオルガン作品である。また今日では史上最大の作曲家として知られるバッハであるが、生前は作曲家としてよりも演奏家としてその名を知られていたことを忘れるわけにはいかない。スカルラッチィもまた当時は主に演奏家として活躍したが、それは宮廷音楽家としてであったことがバッハとは対照的である。彼が残した数多くのチェンバロ・ソナタは、来るべき古典派の音楽様式を予告するものとして重要である。

講師：金澤 正剛(かなざわ まさかた)

1934 年東京生まれ。1966 年にハーヴァード大学大学院博士課程を終了(音楽学)。その後、複数の大学で非常勤講師、米国の大学の客員教授などを勤める。1982 年に国際基督教大学教授、兼同大学宗教音楽センター所長を勤め、2004 年に名誉教授。現在日本リユート協会、日本イタリア古楽協会、日本ヘンデル協会等の会長。著書『モンテカシノ音楽手稿譜第 871 号』(1978、共著、英文)で 1980 年度 ASCAP 賞を、『古楽のすすめ』で 1998 年日本ミュージック・ペン・クラブ大賞を受賞。他に『中世音楽の精神史』、『キリスト教音楽の歴史』などの著書がある。Ph. D.(音楽史専攻)。

福島 康晴 3巨匠、特にドメニコ・スカルラッチィの音楽作品について

概要 ハープシコードのソナタを書いたあのドメニコが、ジュリア聖堂における音楽を指揮し、聖ペテロ聖堂の会堂にある巨大な祭壇のうしろでオルガンをひいていたことを想像するのはむずかしいかもしれない……

(《ドメニコ・スカルラッチィ》ラルフ・カークパトリック著／千歳八郎・阪本みどり訳より)

ドメニコ・スカルラッチィは常にチェンバロ(ハープシコード)のためのソナタを残した作曲家として私たちの前に登場してきた。今でも愛され続けているスカルラッチィのソナタは、彼の人生の後半、マリア・バルバラ王女の音楽教師となってポルトガル・スペインに渡ってから産み出されたものである。一方で、人生の前半を過ごした母国イタリア時代には、私たちから見ると「想像するのはむずかしい」スカルラッチィ像が存在している。しかしながらその時代、スカルラッチィは数多くの宗教曲を作曲していたことが分かっている。中でも《10 声のアリア・マーテル》は非常に完成度の高い傑作であり、この作品を分析することで、スカルラッチィの宗教音楽作曲家としての高い能力に光を当てる。

講師：福島 康晴

東京音楽大学大学院作曲科修了。作曲を西村朗、音楽学を金澤正剛の各氏に師事。大学院修了後バロック音楽に傾倒し渡伊。ミラノ市立音楽院古楽科においてルネッサンス・ポリフォニーを D.フラテッリ氏の下で学ぶ。また、モンテヴェルディ周辺の音楽理論・演奏慣習を R.ジーニに師事する。2009 年に M.グランチーニの論文とコンサートにより、最高点・褒賞付きで修了。帰国後、エクス・ノーヴォ室内合唱団を自ら創設し、そのオリジナリティー溢れるプログラミングと質の高い演奏に期待が寄せられている。また 1600 年前後に出版された当時のイタリア音楽の理論書に精通し、講習会やセミナーなどで講師を務める機会も多い。

山田 高誌 ドメニコ・スカルラッチィのもう一つの顔：世俗音楽曲諸相

概要 古典派以前の作曲家の中で、没後もなお連綿とその作品や名前が受容されてきた者は存外に少ない。その中の一人がヘンデルであり、イタリア人としては実にコレリとドメニコ・スカルラッチィ以外にほとんど名前をあげることはできない。さらに、連綿と続く“受容”といってもそこには大きな偏りがみられ、ヘンデルの場合、イギリス、アイルランドにおける《メサイア》と英語オラトリオの受容以外、つまり、大部分のイタリア語オペラは 20 世紀後半までほとんど未知のものであったし、D.スカルラッチィの場合においては、18～19 世紀の鍵盤ソナタの受容が 20 世紀初頭のナポリ楽派再発見のきっかけとなったにもかかわらず、それ以外のジャンルについて未だほとんど演奏の機会もなく、認知すらされていないのが現状である。

本発表では、主にドメニコの世俗曲(オペラ、カンタータ)の大枠を示しながら、それら史料と研究状況、そしていくつかの作品例を通して彼の音楽曲の特徴を提示してみたいと思う。

講師：山田 高誌

熊本大学教育学部准教授。専門は音楽学、オペラ史。兵庫県出身。早稲田大学卒業。大阪大学大学院文学研究科音楽学博士後期課程満期退学。イタリア国立バーリ音楽院上級ディプロマコース(記譜史)修了。日本学術振興会特別研究員SPD(東京芸術大学)、大阪大学大学院助教等を経て2014年より現職。2007年には<D.スカルラッティ音楽祭>をイタリア文化会館東京において企画、実施。主に18世紀ナポリの諸劇場についての史料研究を行うほか、国指定重要文化財・八千代座(熊本県)の大正時代の興行史料についても調査を行っている。

渡邊 順生 タンゲンテンフリーゲル:バッハとピアノの関わりについての新しい視点

概要 タンゲンテンフリーゲルは裸の木のハンマーによって弦を打つピアノの一種であるが、その音色は所謂ピアノよりは、チェンバロやクラヴィコードに近い。クリストフォリが発明した近代的なピアノとは全く異なる伝統から生れた楽器である。近代的なタンゲンテンフリーゲルのアクションは、バッハの知人でもあったザクセンのオルガニスト、Ch.G.シュレーターによって1720年頃に開発された可能性があり、それに基づいて製作された実際の楽器をバッハが知っていた可能性が高い。もしそれが事実であったとすれば、これが「バッハにとつての最初のピアノ」であったかも知れず、バッハのクラヴィーア音楽に対して新たな視点を提供する楽器として注目に値する。

講師：渡邊 順生

鍵盤楽器奏者及び指揮者として活躍。論文執筆や楽譜校訂も手がける。2010年度サントリー音楽賞受賞。1950年鎌倉の生まれ。一橋大学社会学部。アムステルダム音楽院卒業。ソニー、コジマ録音等より多数のCDをリリース。『フレスコバルディ／フローベルガー：チェンバロ作品集』(コジマ録音、2016)でレコード・アカデミー賞受賞。著書『チェンバロ／フォルテピアノ』(東京書籍、2000)、『バッハ・古楽：チェロ～アンナー・ビルスマは語る～』(アルテス・パブリッシング、2016)。上野学園大学客員教授、東京音楽大学、桐朋学園大学講師。

三ヶ尻 正 新しいヘンデル像：政治・外交と音楽ビジネス

概要 ヘンデル作品の中核をなすオペラやオラトリオは、《メサイア》ほか数曲を除いて没後長く忘れ去られていたが、20世紀終盤以降ヨーロッパを中心に盛んに上演されるようになった。自筆譜の多くが完全な形で残っており、他と比べれば研究者にとっても有利である。その一方で当時の社会的・文化的背景は現代とは大きく異なっていた。それは作風や音響にも影響しているのではないか。

イタリアで修業時代のヘンデルは、スペイン継承戦争で割れた親仏派と親墺派どちらの台本にも作曲している。また次の英国王に決まっているハノーヴァー侯家の楽長になり、先遣隊としてロンドンに乗り込みつつも、謎の帰国や再渡航をするなど不可解な行動が目立つ。ロンドンでは新王家と親密な筈の彼が、反王室・亡命王朝支持の台本に作曲するなど一見不可思議な活動も見られる。これらを解明するにはオペラ・オラトリオといった劇音楽の持っていた政治・外交に関わる機能と、ヘンデルを含む当時の音楽家が担っていた音楽以外の役割の理解が不可欠である。また黎明期の音楽ビジネスでヘンデルがいかにか成功したかについても検証したい。

講師：三ヶ尻 正(みかじり ただし)

東京大学英文科卒。ヘンデル研究・オラトリオ研究、声楽家の言語指導(英独羅)、対訳・字幕に従事。オラトリオの歴史や声楽作品の政治史的解釈に関する執筆・講演で好評を博す。言語指導は桐朋学園大学、国立音楽大学大学院、新国立劇場オペラ研修所等で行なっている。著書・訳書に『メサイア・ハンドブック』『ミサ曲・ラテン語・教会音楽ハンドブック』『オペラ事典』(共著・編集協力)『ヘンデル 創造のダイナミズム』(共訳)など。新国立劇場オペラ研修所講師。日本音楽学会、日本ヘンデル協会、日本イタリア古楽協会会員。

加藤 拓未 歴史の中でとらえるバッハの受難曲

概要 今日、バッハの《マタイ受難曲》そして《ヨハネ受難曲》は専門家の間だけでなく、我が国の合唱愛好家たちにとっても重要なレパートリーになっている。なかにはバッハの《マタイ》を演奏会で何回も歌いたがために、複数の合唱団を渡り歩くという熱烈なファンもいるという。バッハの受難曲の定着・普及は、この20年くらいで急速に進んだように思う。それは日本におけるバッハ文化の成熟であり、喜ばしい現象と言ってい。しかしその一方で、バッハの受難曲の「歴史的な背景」については、いまだにあまり理解が進んでいないように思える。相当な《マタイ》ファンでも「バッハ以外の作曲家の受難曲もあるんだよ」と言うと、驚いたような反応が返ってくる。実は、他の作曲家の受難曲について理解することは、バッハの作品を理解する上でも非常にプラスになる。そもそもバッハ自身が、他の同僚が書いた受難曲に対し興味を持っていた。そこで今回はテレマンの受難曲や、若きヘンデルの作と言われている受難曲を取り上げ、バッハの作品と比較することで、なにが見えるかをお話したい。

講師：加藤 拓未

1970年、アメリカ合衆国シアトル生まれ。専門はJ.S.バッハを中心とするドイツ宗教音楽史。国立音楽大学大学院修了。明治学院大学大学院博士後期課程修了(博士〔芸術学〕)。2004～10年にNHK-FM「バロックの森」にレギュラー出演し、好評を博す。その後、同FM「ベストオブクラシック」にも出演。共著に『バッハ・キーワード事典』、訳書に『バッハ・古楽：チェロ：アンナー・ビルスマは語る』など。現在、明治学院大学キリスト教研究所協力研究員、合唱団「バッハ・ゲゼルシャフト東京」代表、「東京マルコ受難曲合唱団」代表。